

持続可能な消費—二つのバージョン (3)

福 士 正 博

IX 実践理論と消費研究

前稿で、シュパルガレンを中心とする環境近代化論第2世代による持続可能な消費の取り組みが、アンソニー・ギデンズの構造化理論を下敷きにしなが、社会的実践論として組み立てられていることを見てきた。しかし、実践理論を下敷きにした持続可能な消費論は、シュパルガレンの議論にとどまるものではなかった。この議論と一部共有しつつ、別の視座から消費のあり方を追究しようとするエリザベス・ショブに代表される消費研究も同時に行われていたのである。本稿では、実践理論の要点と実践理論が消費分析にどのように適用されているのかを整理した上で、シュパルガレンとショブの持続可能な消費論を対比し、両者の基本的な違いを浮き彫りにしてみることにする。

まず注意しておきたいことは、実践理論に基づく消費分析が、ブルデュー、ギデンズ、後期フーコー、セルターなど、1970年代以降の実践理論だけに依拠して組み立てられていたわけではなかったことである。むしろ環境近代化論が組み立てる持続可能な消費論は、セオドール・シャツキ、アンドリーズ・レックヴィッツなどに代表される実践理論第2世代に依拠して議論されていたと言う方が正確である。第2世代の実践理論は、第1世代のそれを土台にしなが、そこでは十分に果たすことができなかつた課題を掘り下げることを目指していた。ジョン・ポスキルは、第1世代と第2世代の関係について次のように述べている。

「実践理論研究者を二つの「波」、或いは世代に区別することができる。20世紀の何人かの研究者によって主導されていた第1世代が実践理論の基礎を作ったのだとすれば、第2世代は現在、こうした基礎を精査し、理論的構築物を新しく拡張しようとしている¹⁾」。

それでは、ここで言う新しく拡張しようとしている理論的構築物とは何なのだろうか。

第1に、消費を実践に置き換えることの意味である。ギデンズの構造化理論を下敷きにしなが、消費者を市民-消費者に置き換えたシュパルガレンの試みが、実践理論を通じて可能になった理由を問うことがここでは重要となる。第2世代に属するアラン・ウォードは、実践理論を通じて消費分析を行うことの結果のひとつは、消費それ自体を実践と見ることと同時に、現代社会の殆どの実践に当てはまるひとつの契機と見るということを指摘している。動機、欲望、選択はこれまで、消費が行われる時のプレリユードと考えられていた。消費を

実践に組み替えるならば、それらは、プレリユードではなく、実践を通じて生まれるというように変化することになる。第2に、実践理論における社会的なるもの (the social) の位置である。すでに指摘したように、消費（とくに個人消費）を私的関心に基づく行為としてではなく、公共性に拡がる関心に支えられた行為であると考えれば、社会的なるものの根拠を問題にしなければならなくなる。

この二つの問題に共通しているのは、実践を構成する要素の理解である。

第1に、消費主体としての諸個人のエイジェンシー (agency, 行為主体性) の理解に関わる問題がある。消費の効率性と充足性との対立を基本的視座に据えている本稿の問題関心からすれば、消費主体が、効率性の追求から更にその先にある充足性の追求まで視野に入れるようになるには、実践理論がエイジェンシーをどのように理論化しているのかを正確につかまえておく必要がある。第2世代の実践理論を消費分野に適用した最初の論文と言われているウォードの「消費と実践理論」の中に、次のような指摘がある。

「実践理論の前提を所与とするならば、実践理論がこれまで消費の領域に体系的適用が行われてこなかったことは奇妙なことである。ギデンズとブルデューといった二人のよく知られた実践理論家を挙げることは適当ではないかもしれないが、彼らが多くの貢献をしてきたことは間違いない。ギデンズはライフスタイルの分析にあたって、個人行為に関して完全に自発的な分析をしていたにもかかわらず、『社会の構成』ではその議論を棚上げしていたように思われる。『実践の論理』の指令を追求していたブルデューは、『ディステインクション』の中で提起した嗜好の説明に辿り着いたとは考えられない。というのは、ハビトゥスと資本との関係に焦点を当ててはいるものの、『ディステインクション』の中でかなり議論されていた実践理論を採用することがなかったからである。したがって彼は、プラチックとプラクシスという二つの意味の間で揺れ動き、前者に対する弱い代替案として界概念を用いていたとしか思われ²⁾」。

ここでは、実践理論が構造と主体との二元論の克服を課題としていたにもかかわらず、ギデンズもブルデューも、構造が生産・再生産されるメカニズムの解明に傾斜しすぎていたために、エイジェンシーの解明が弱く、行為の再帰的モニタリングや構造と主体とのサイクルを完結させていないという難点を抱えていたことが指摘されている。ここでの要点は、ルーティン化されている日常生活の中から、それを打ち破る契機をエイジェンシー概念の中に発見することが難しいということにある。ルーティン化された消費が大量消費となって環境破壊につながっているばかりでなく、その反省から要請された「緑の消費者主義」自体が徐々にルーティン化されてしまっている現実にある時、実践理論は制度化された消費にどのように対応すればよいのだろうか。消費の効率性が充足性に発展していく契機とプロセスを発見しようとする本稿の問題関心からすれば、エイジェンシーの中にその契機を発見しづらいという第1世代の実践理論の現状は重大な意味を持っている。第2世代の実践理論が取り上げ

た課題のひとつに、こうしたエイジェンシー概念を鍛え直すという問題がある。倉田良樹の指摘にあるように、「構造の二重性というギデンズの表現の中には一つの盲点が含まれていることになる。構造の二重性という継続的な流れの中で再生産されているのは構造だけではない。行為主体という存在の再生産がなければ、構造の再生産もあり得ないことは明らかである³⁾」。掘り下げられなければならないのは、実践を通じて生産・再生産されるエイジェンシーのあり様である。ギデンズの構造化理論を見るかぎり、実践に組み込まれたエイジェンシーが生産・再生産される仕組みは必ずしも掘り下げられているわけではない。

消費研究が実践理論第 2 世代から学んだもうひとつの課題は、消費主体が環境テクノロジーを主体的に受けとめ、それを生活様式にどのように身体化していったのかという点である。大量消費につながる既存の消費システムを変革し、持続可能な消費様式につなげていくには、その過程を導く動因としてのイノベーションの評価が必要になる。すでに述べたように、持続可能な消費を解剖するには、IPAT 式で言う A と T の関係、すなわち消費主体の生活様式と、そこに浸透し、身体化されていくイノベーションの役割が結びつく過程を分析する必要がある。シュバルガレンの議論にも、ショブの議論にも、実践理論に組み込まれたテクノロジーやイノベーションが重要な位置を占めている。例えばシュバルガレンは、「我々は、緑のイノベーションが社会的実践の中に組み込まれ、埋め込まれていく方法を探究する。この目的のために、我々は、環境近代化論が 1980 年代に展開され、2000 年以降修正、更新されてきた社会的実践理論と結びつけ、それを活用していかなければならない」と述べている⁴⁾。ここでは、実践理論の第 1 世代と第 2 世代の違いを意識しつつ、その成果を積極的に取り入れる必要があること、そしてその際の重要な論点としてイノベーションの位置づけがあることが指摘されている。ショブの関心を下支えているのも、テクノロジーと実践の共進化であった。ショブが『快適性、清潔及び利便性』を発表した関心のひとつは、「日常的な目に見えない実践の分析を通じた消費、テクノロジー、社会変化の理論を再訪すること」であった⁵⁾。

X 実践理論と消費

そこで、両者の議論の違いを明らかにするために、あらかじめ実践理論の基本的論点を整理しておくことにしよう。

まず明らかにしておかなければならないのは実践概念についてである。実践概念には、英語表記のプラクティス (practice, 実践) ではつかまえることが難しい多義の意味が存在する。英語表記は、ドイツ語表記で言う "praxis" と "praktik" の両方の意味が混在しており、どちらの意味で使用されているのかは、そのままではわからないという欠点を抱えている。英語表記の実践という語彙を用いる場合、文脈にそくしてその都度判断しなければならない。

この点で、レックヴィッツの次の指摘は、実践概念をつかまえる時の要点を的確に述べている。

「何よりも、「実践」(単数)と「実践」(複数)(ドイツ語では praxis と praktiken という的確な区別がある)を区別しておく必要がある。単数の実践 (praxis) は、人間行為全体を述べただけの強調語という意味でしかない(「理論」やたんなる思考と対比して)。しかし、社会的実践理論の意味での実践(複数)は別の意味を持っている。実践 (praktik) とは、相互に関係した、身体活動、精神活動、「モノ」やその利用、理解形態での背景知識、ノウハウ、感情状態、動機知識といった、いくつかの要素から構成されているルーティン化した行動である。実践は、これらの要素の存在、具体的な相互のつながり、そしてどの単一要素にも還元しえない、必然的に依存している「ブロック」によって形成されている。同様に、ひとつの実践は、実践を再生産する、多くの、単一かつ時には斬新な行為から型式を表わしている。各個人(身体的、精神的担い手として)は、ある実践—実際には、お互いに調整の必要のない多くの異なる実践—の「担い手」として行為する。このように、彼女／彼は、身体的行動パターンの「担い手」であるばかりか、理解、ノウハウの認知、欲求の一定のルーティン化された方法の担い手でもある。このように、理解、ノウハウの認知、欲求という、慣行化された「精神的」活動は、単一個人が参加する実践の必要な要素であり、必要な質である。更に、「すること、述べることをつながり」(シャツキ)としての実践は、それを実行する主体にとって、理解可能であるばかりか、潜在的オブザーバーにとっても、同様に理解可能なものである。実践はこのように、身体が動かされ、対象物を扱い、主題が扱われ、ものごとが叙述され、世界が理解される、ルーティン化した方法である。実践が「社会的実践」であるということは、その場合、言うまでもなく同義反復である。実践は、様々な地域、異なる時間、そして様々な身体／精神によって行われる行動や理解のひとつの「タイプ」であるという意味で、社会的である。しかしこのことは必ずしも、「相互交流」、すなわち、問主観という意味で社会的なるものを前提としているわけではない⁶⁾」。

レックヴィッツの指摘を手掛かりに、いくつか重要な論点を確認しておくことにしよう。

(1) 実践とは何か

第1に、社会的実践という時の実践とは、プラクシスではなく、プラチックであることである。「実践が社会分析の「最小単位」として扱われる」という時の実践とは、プラチックを指している。プラクシスは単数で表記する実践概念であり、人間行為全体を総称したものでしかない。しかし、社会生活に適用され、社会分析に用いられる実践とは、もう一つの実践概念であるプラチックを指している。実践が社会的実践であることが同義反復であるのはこの意味においてである。プラチックとは、身体活動、精神活動、「モノ」やその利用、理解形態での背景知識、ノウハウ、感情状態、動機知識といった要素から構成され、日常生活

に、ルーティン化した形で現れる行動である。ここで重要なのは、プラチックが、ここで挙げられているいくつかの要素から構成され、それが日常化されていることである。プラチックが複数表記で使われるのは、これらの要素が集まり、ひとつの「ブロック」を形成する集合体であるからである。複数表記の意味は、実践が複数行われているということではない。複数の要素が相互に関係することで、ひとつの実践を形成し、そのことによって他の実践と差別化されているからである。

シャツキは、「実践とは活動の「束」、すなわち行為の組織化されたつながりである。どの実践にも結果的に、活動と組織化という、二つの全体的な領域が含まれている」と述べている⁷⁾。ここで言う活動の束とは、実践を構成する諸要素のことを指しており、その遂行を行為と呼んだ上で、それを束ねることを組織化として、実践の原理に組み入れている。

シャツキは、「実践とは、実践的理解、規則、目的志向構造、そして一般的理解によって結びついた、時間的に進化し、開放的な、すること、述べることの集合体である」と述べ、実践的理解（何を述べるか、何をするかに関する理解を通じたもの）、規則（明確な規則、原理、指針を通じたもの）、目的志向構造（目的、プロジェクト、タスク、目的、信念、感情、ムードなど 構造と呼ぶものを通じたもの）をその要素として挙げている⁸⁾。組織化とは、これらの要素を束ねること、それが実践の前線にあること、それ自体が実践であるということの意味している。シャツキは、こうした三つの要素がそれぞれの実践で具体的な形でつながっていることを組織化と呼び、つながりのある実践を「統合的实践」(integrative practices) と名づけている。それに対して、統合的实践に含まれる各要素を具体的に実行することをパフォーマンスとしての実践 (practices as performance) と名づけている⁹⁾。

ウォードは、シャツキにしたがって、パフォーマンスとしての実践を「すること」(doing)、それを自ら合理的と考える理由の説明を「述べること」(saying) とした上で、二つの要素を、理解（ノウハウと実践的解釈）、手続き（規則、原理、制度）、関与（肯定的・規範的方向性）の三つにまとめている¹⁰⁾。料理、投票行動、企業活動、レクリエーションなど、具体的な実践はすべて、「すること」、「述べること」のつながりによって組織された統合的实践である。その一方、実践には、実践することの意味を問い、それを理解し、周知させる要素、例えば、叙述する、規則に従う、説明する、イメージするといった、理解と手続きにつながる分散的实践 (dispersed practices) が含まれている。実践が身体的行為ばかりでなく、精神的行為でもあると言われるのは、この側面を指摘したものである。分散的实践は、全ての実践に含まれる実践のひとつの型式である。シャツキは、分散的实践が機能する要件を三つ挙げている。

「X をするという分散化した実践は、主に X をすることの理解によって結びついた、すること、述べることの集合体である。こうした理解は通常三つの構成要素を持っている。(1) X という行為（述べること、命令すること、疑問に思うこと）を行う能力、(2) 自己及び他者

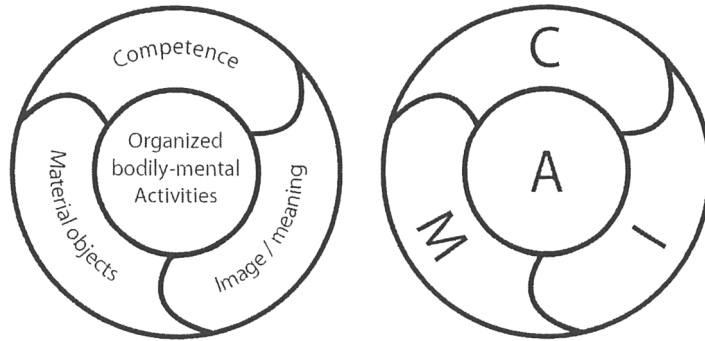
の場合の両方において、Xをすることの意味を同定、帰属する能力、(3) Xをすることに
対応する能力。この文脈において「……する能力」は、「……の仕方について知ること」と
いうように、別に表現することができる。すること、述べることという実践が実践を構成す
る理解の表現である以上、分散化した実践は、彼らが表現する理解によって結びつく、する
こと、述べることの集合である¹¹⁾。

実践を遂行するには、「何を行うか」、「どのように行うか」、「その行為がどのような意味
を持っているのか」などの理解が必要になる。プラチックという意味の実践は、身体に内面
化され、慣習化されている行為であるが、そこには相互行為を行う主体による「世界を理解
し、何かを欲求し、どのように行うかを知る、ルーティン化された方法」という精神行動が
含まれている。こうした行動は、「対象物、人間、自己の理解を含む、「世界を理解する」特
定の方法」という、ギデンズが言う相互知識を前提としている。実践とは、こうした知識を
獲得する過程でもある。理解は知識に支えられている。ギデンズは、認知されざる条件と、
意図せざる帰結のために、知識は不安定にならざるをえないという限界を抱えていると指摘
しているが、行為が、知識能力のある主体による世界を広げていく過程であると考えられて
いることは間違いがない。

このように実践は、パフォーマンスとしての実践と、実践に含まれる諸要素がどのよう
につながり、組織化されているのかという全体としての実践 (practices as entity) の二つに
よって構成されている。

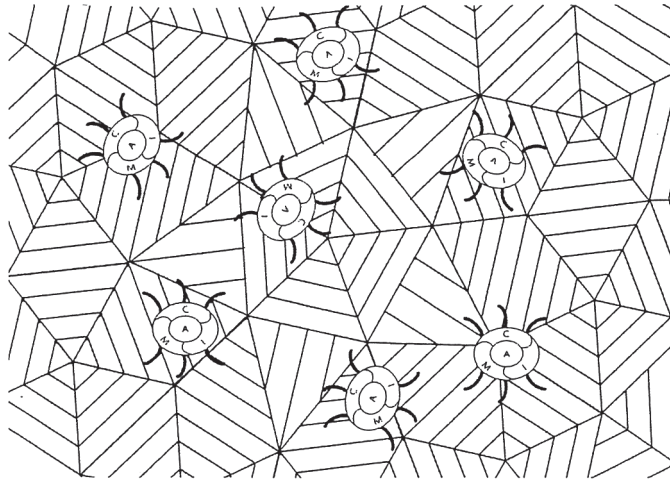
実践は、実践を構成する諸要素の組織化を通じて行われる。ショブとパントザーは、実践
の構成要素を、物質的对象物、有能性、イメージ/意味の三つにまとめている。ショブは、
これら三つの要素がそれぞれ独自の動きをし、実践から相対的に独立していることを指摘し
ている。「実践は、(独自の動きをする) 要素の循環と再結合を通じて入り込み、転換され
る」のである¹²⁾。三つの要素をまとめて図示したのが第1図である。組織化された身体的-
精神的活動は、物質 (M: 対象物が作られることがら、テクノロジー、有形の物的全体、モノ)、
有能性 (C: スキル、ノウハウ、テクニック)、イメージ/意味 (I: 象徴的意味、観
念、アスピレーション) に取り囲まれる形で構成されている。持続可能な消費にとって、
「問題は、資源利用 (注-図で言う M) が常に社会的実践との関係で行われていることにあ
る」。すなわち、「資源は実践を通じて動員されている以上、人々が日常生活の中で結びつけ
る実践が環境影響を決定する¹³⁾」。社会的・物質的構造は、実践の「束」(bundle) と「複
合体」(complex) に分けられる網の目を通じて形成されている (第2図参照)。持続可能な
消費を展望するには、現在の環境影響が「以前の実践を通じて確立されていた社会的、物質
的枠組みに依存している」以上、この枠組みを変更する道を探る必要がある。例えば、エネ
ルギー消費に焦点を当てるならば、エネルギー消費量は、各具体的な実践のエネルギー集約
性、実践者が行う実践のつながり、参加者が時間制約の中で行うことのできる実践数、実践

第 1 図 有能性、物質及びイメージ形状としての実践



(出所) Inge Røpke and Toke H. Christensen, Transitions in the wrong directions?, Elizabeth Shove and Nicola Spurling(ed.), *Sustainable Practices*, 2013, Routledge, p. 52.

第 2 図 実践と社会的・物質的フレームワークの相互作用



(出所) Inge Røpke and Toke H. Christensen, op. cit., p. 52.

を行う際の実践者がカバーする空間の程度などに依存している。エネルギー消費を削減するためには、各項目の実践のあり方の再検討を必要とする。

(2) ルーティン化した行為—実践の諸要素

第 2 に重要なのは、複数の要素が集まることで、何故実践が「ルーティン化した行動」となって現れるのかという問いである。ここで言うルーティンとは、ブルデューのハビトゥス概念につながる、日常生活で繰り返し行われる、決まりきった行為という意味ではない。表面的にはその通りであるが、それより大事なのは、この指摘が、「要素の連続性は、社会的再生産自体によって確保されている」というギデンズの指摘を受けていることにある。要素

の連続性が再生産されている場こそ日常生活であり、「それぞれの社会や文化において、継続的に相互行為を発生させるための方法は、……その相互行為に加わった人々が潜在的に承認したものである」。すなわち、当該行為がルーティン化しているのは、その行為を実践する彼／彼女ばかりでなく、相互行為に加わる人々がその行為を構成する諸要素を認知し、相互知識に基づいて承認しているからである。ギデンズが、「存在論的な保証が発動するのは、慣習（意味作用のコードと規範的規制の形態）に対して行為者が暗黙に抱いている信頼を拠り所とするためである。構造の二重性の中での社会生活の効果的な再生産は慣習によって可能となる。社会生活では多くの場合、存在論的な保証の感覚は、相互行為を「何ら問題はない」として「自明視」する相互的知識にもとづいている」と述べている。このように、「存在論的な保証の存続と社会生活の日常化された性格には密接な関係」があり、「行為の合理化がただちに行為者の基本的保証システムを慣習的に結びつけている」ためである¹⁴⁾。

実践理論第2世代が行おうとしているのは、こうした第1世代の関心を日常生活の各領域に適用することである。消費領域もそのひとつである。ルーティン化してしまっている実践を打破し、別のルーティンを目指す動きが持続可能な消費論に含まれているのだとすれば、そこには実践を構成する要素について消費主体が疑問視する契機が存在しているからである。ギデンズは、「『脱ルーティン化』ということで私は、日々の相互行為の自明性の支配に対抗的に作用する影響を考えている」と述べている¹⁵⁾。持続可能な消費が問うべきことは、「脱ルーティン化」する契機が何かを明らかにすることである。

(3) 行為主体の位置

第3に重要なのは、行為主体の位置である。実践理論では、行為主体といっても、主体が実践に先行しているわけではない。実践理論が、ホモエコノミカス (homo economicus) という自己の利益を追求するだけに腐心する合理的な主体像や、ホモソシオロジカス (homo sociologicus) という社会規範を内部化した過度に社会化された主体像を批判しているように、実践が論理的かつ歴史的に個人に先立っており、いわば実践が実践者を補充している以上、主体が分析の出発点であるわけではないからである。実践理論が想定するのはホモプラクティカス (homo practicus) である。主体の前に実践が先行するということは、実践を組み立てる要素のひとつに行為主体があるということを意味している。その意味で、行為主体は、知識能力やその潜在能力を有し、特定の実践について具体的なノウハウや背景知識を活用する、実践に組み込まれた存在である。エイジェンシーとは、こうした行為主体を概念化したものである。

この点で、レックヴィッツが、先の引用文で、「各個人（身体的、精神的担い手として）は実践の「担い手」として行為する」と述べていることにあらためて注意しておく必要がある。伝統的な人間像は、ホモエコノミカスにしても、ホモソシオロジカスにしても、このよ

うには考えない。とくに、行為を目的志向にしたがって位置づけるホモエコノミカスは、自己の利害にしたがって合理的に行動することを求めるだけに、実践を構成する要素についての理解は個人の属性・資質に関わるものと考えている。しかし、行為主体を実践の「担い手」としてとらえることは、実践を行う行為主体自身、実践の要素のひとつであるということになる。ショブが、諸個人を実践の担い手として理解することは、「理解、ノウハウ、意味、目的が個人の属性と受け止めている伝統的アプローチからの劇的な離脱である。レックヴィッツは、これらを、一個人の資質としてではなく、単一個人が参加する実践の要素、質として扱う方がより合理的であると論じている」と述べている¹⁶⁾。実践とは、ルーティン化した身体的行為であるが、理解、ノウハウ、意味、目的などを自己に内生化した慣行化した精神活動も含まれていることに注意しておかなければならない。

レックヴィッツは、「実践理論には、主体と区別された「個人」に相応しい場所がある。多様な社会的実践があり、全ての主体が多様な社会的実践に関わる以上、諸個人は、実践や、身体／精神的ルーティンの斬新な交差点である」と述べている。諸個人を実践の担い手として理解することは、「実践理論において諸個人は、「実践の独特な交差点」と見られることになる。しかしこのことは、どのように実践が実践者をリクルートするのか、また、（個人の視点から）人々は日常生活の実践結合をどのように扱うのかといった問題を提起することになる¹⁷⁾」。この指摘にあるように、個人を実践者と位置づけたからといって、個人の姿が消えてなくなっているわけではない。例えば、子供を持つ共稼ぎ家庭の場合、調理実践が子育てと家族で食事をとるという二重の意味を持ち、その交差点に個人が実践者として登場するということが考えられる。このように、ひとつの実践が複数の意味を持つことは少なくない。むしろ、個人の消費行動の特徴を記述することは、実践としての消費を浮き彫りにすることでもある。

同時に重要なのは、実践理論第2世代が行為者ネットワーク理論の影響を受け、行為主体の拡張を行っていることである。シュバルガレンはこの点を次のように説明している。

「ブルデューもギデンズも、彼らの社会的実践の文脈において、財や対象物あるいはモノの役割をどのように理解すべきなのかについて詳細な説明を行っていなかった。例えば、……ギデンズの構造化理論は、カロン、ビジカー、そしてラトオールなど今日、行為者ネットワーク理論としてよく知られているものが社会科学で幅広く議論されていなかった時代に定式化されている。このことがおそらく、『テクノロジー』のテーマが社会変化の主要起動力として誤った受け止められかたをしている産業社会の理論領域以外であり関心が払われなかった理由である。テクノロジーの課題や社会的実践の「物質性」(materiality)は、環境近代化論の第2世代理論が行った実質的貢献のひとつである。中心的人物は、シャツキ、レックヴィッツ、ウォードである。彼らは、人間主体とモノが共存しているというように、「社会的実践」概念の詳細な説明を行いつつ、ギデンズやブルデューの研究と社会的実践理

論を結びつけようとしている¹⁸⁾」。

この指摘にあるように、実践理論において行為主体は人間ばかりではない。テクノロジーも、モノも、実践を構成する要素のひとつであり、行為主体と同様の位置にある¹⁹⁾。実践理論第2世代が果たした理論的貢献のひとつは、このように、行為主体の位置づけを変更したことにある。

(4) 実践理論における「モノ」—物質性の位置

社会的実践が、実践を構成する諸要素の結びつきによって行われるという場合、行為主体の役割を強調するばかりに、モノや物質性の役割を過小評価するようなことがあってはならない。レックヴィッツの指摘にもあるように、実践理論においてモノが果たす役割は決定的に重要である。それは、実践理論が、行為者ネットワーク理論の影響を受け、モノを理論の中に組み込むことを要請されていたからである。実践とは、世界に実在するもの、すなわち、人間、人工物 (artifacts)、生物 (living organism)、モノなど、諸要素の組織化である。人工物が第2次自然を指しているとするれば、モノは自然から抽出される第1次自然を指している。持続可能な消費概念のように、環境の視座から消費のあり様を再検討しようとするならば、行為主体としての人間が、とくに第1次自然を資源として抽出し、加工し、消費することで、結果的に「人間の豊かさにつながる効率的な資源利用」を損ねてしまっている現状を打破するものでなければならない。そのためには、主体-客体という二元論を克服し、客体として考えられていたモノ (物質性) を主体の中に布置する転換が必要になる。実践理論の視座から消費のあり様を再検討し、持続可能な消費論として組み立てるためには、第1次自然、第2次自然との関係を再構成し、主体としてのモノという視座を持つことが重要となる。

実践理論第1世代は、人間以外の擬似対象や非人間的動物を、実践を構成する要素として組み入れる視点を持つことができなかった。この点は、実践理論の「強いバージョン」を展開していると言われるシャツキにも反映していた。彼は、「活動とは人間の活動である。このような書き方をする中で、私は、行為者や行為カテゴリーをあらゆる種類の実在にまで拡張しようとする行為者-ネットワーク (理論) と戦っているという暗黙の前提に立っている。私は、実践には様々な実在の行為が含まれており、人々の行為だけを含んでいるのではない」と論じている理論家に直接反対する立場にある²⁰⁾」と述べ、行為主体は人間に限定されると述べている。レックヴィッツは、シャツキを批判しつつ、シャツキの実践理論を、「社会的実践にとってモノの構成的ステータスを無視すること」はますます難しくなっているというラトールの問題提起で補完することを提唱している²¹⁾。実践理論にとって、主体と主体との間主観性 (intersubjectivity) は勿論重要である。しかし、客体同士の間客観性 (interobjectivity) もまた重要であり、間主観性が優先しているなどと主張することはできない。シュバルガレンも、この点から、「ひとつの明確な結論は、対象物が問題であること、

製品、テクノロジー、人工物の役割は社会的実践のレベルにおける環境変化を理解する重要性という点で過小評価することはできない」と述べている²²⁾。

(5) 社会的なるもの

第5に重要なのは、社会的なるものの位置である。レックヴィッツは、1970年代以降行われた文化的転回（cultural turn）の思想系譜の中で、実践理論がどのような位置にあるのかについて整理している。それによれば、実践理論は言語論的転回や解釈転回の影響を受けた文化理論のひとつであり、人間と社会秩序の条件の把握をめぐって、文化メンタリズム（主観的、客観的）、文化テキスト主義、間主観主義といったその他の文化理論と異なった考え方が提示されている。

文化理論は、目的を志向した理論（人間像としてのホモエコノミカス）と、規範を志向する理論（人間像としてのホモソシオロジカス）の中間的位置（middle ground）にある。実践理論がとくに他の文化理論と異なっているのは、社会的なるものの解釈である。レックヴィッツは、実践理論を含めた「文化理論の新しさは、主体が、一定の型式にしたがって世界を解釈したり、それにとまなうやり方で振る舞うことを可能にし、制約する知識の象徴的構造の再構築によって行為を説明、理解しようとしていることにある。社会秩序はその場合、相互の規範的期待の応諾物として現れるのではなく、集団的認識構造や象徴構造の中や、意味を世界に帰す社会的に共有した方法を可能にする「共有知識」に埋め込まれたものとなっている」と述べている²³⁾。実践が社会分析の最小単位であるということは、社会的なるものが実践を通じて生まれると考えられているからである。実践理論は、実践を構成する諸要素の理解と解釈を通じて社会的なるものを浮かび上がらせ、そのことから諸個人は必然的に実践を社会的実践として行うことになる。何故なら、諸要素の理解と解釈とは社会的世界の理解と解釈に他ならないからである。

XI 実践理論と消費分析

それでは、これまで見てきた実践理論を消費分析にあてはめた時、持続可能な消費につながる優れた論点をどのような形でそこから引き出すことができるのだろうか。

ウォーデは、「消費と実践の理論」において、「殆どの実践、すなわちおそらく全ての統合的実践は、消費を必要とし、かつともなっている。……この考えに立つならば、消費はそれ自体ひとつの実践ではなく、むしろ殆ど全ての実践に関わる契機である」と述べている²⁴⁾。消費はこのように実践の契機である。食事をとる、読書をする、サッカーをする、音楽を聴くなどの具体的な統合的実践の陰に、消費という実践が関わっている。実践が消費を生み、全ての実践に消費が関わっている。消費がなければ実践も成立しない。このように、実践と

しての消費は、当該行為としての消費と、全ての消費実践に関わる消費というように、狭義と広義の二つの意味を持っている。消費が前者ばかりでなく後者を含む包括的な意味を持つのは、市場制度が現代社会の隅々に行き渡り、市場を通じた交換行為がなければ日常生活が成り立たず、殆ど全ての実践が財やサービスを購入し、それを消費するという行為と結びついているからである。

おそらく人は、「サッカーをしたいから」、「音楽バンドを組みたいから」という理由で、ボールやウェア、ドラムやギターを購入すると言うかもしれない。このように、「……したいから」という理由で、消費が生まれると考えるのが普通である。消費を個人主義から見れば、個人的欲求にしたがって消費が生まれ、欲求が拡張するにしたがって、大量消費と大量生産が生み出されると考えられるだろう。しかし、実践理論はそのようには考えない。実践理論は逆に、「個人的欲求ではなく、実践が欲望を創出する」と考える。実践理論にとって、「消費の性格や消費過程を説明するのは、行為過程に関する個人の決定というより、実践に関わっているという事実である」。ウォードは、このことから、「消費は、日常生活の殆どの領域の統合的一部として精査することが求められており、需要に還元することはできない。このことを想起するならば、私は、功利主義的目的であれ、表現的もしくは熟慮的目的であれ、消費を、購入の有無に関わらず、財、サービス、パフォーマンス、情報もしくは環境の専有と評価に主体が一定程度任意に関わる過程と理解しておきたいと考えている」と指摘している²⁵⁾。

1970年代以降の文化的転回で強調されたのは、消費を通じたアイデンティティの確立、コミュニケーションの役割、モノが象徴する消費主義といった「表現的個人主義」であった。実践理論が異色なのは、他の文化理論の消費者像では消費を取り巻く社会的諸問題を解剖することができないという不満から、新たな像を提示しようとした姿勢にある。ウェルチとウォードは、文化的転回の中で実践理論の果たす役割について次のように述べている。

「実践理論は、消費研究に新しい展望を提示することを約束している。それは第1に、主権に基づくか、表現的個人に基づくのかは別として、個人選択モデルに対する対案を提供すること、第2に、文化的分析では通常隠されてしまっている現象を明らかにすることである。それは、個人主体の点から行為の説明を行おうとする圧倒的傾向と、消費の舵取りにおける象徴の重要性が誇張されていることへの対応であった。主権消費者モデルに対して実践理論が強調するのは、行為に対するルーティン、具体的行為に対するフローや結果、決定に対する性向、熟慮に対する実践意識である。文化的転回に対して強調されているのは、思考より行動、象徴より物質、ファッション化された自己表示の表現的利点より身体化された実践的有能性である²⁶⁾」。

この引用文で強調されているのは、消費者主権モデルに対する批判と、他の文化理論に向けられた批判という二つの批判である。後半部分で、「行為に対するルーティン、具体的行

為に対するフローや結果、決定に対する性向、熟慮に対する実践意識」というように消費者主権モデルに対する対案と、「思考より行動、象徴より物質、ファッション化された自己表示の表現的利点より身体化された実践の有能性」というように他の文化理論に対する対案の、二つの対案が提示されている。この点で実践理論は、既存の文化理論より、持続可能な消費を分析する優れた視点を持っている。第 1 に、個人消費者を想定する既存の文化理論が大量の資源やエネルギー消費が顕示的消費につながっている現実を説明することができないのに対して、実践理論は消費を財やサービスの購入から、利用、廃棄に至る全般的な過程を取り上げることでできる幅広い視野を持っていること、第 2 に、実践理論は、消費分析を行う際でも、消費自体というより、社会的実践のダイナミクスに焦点が当てられているため、消費が果たす環境影響を可視化しやすいこと、第 3 に、他の文化理論が環境行動の現動化をうまく説明できないのに対して、実践理論は、他の文化理論と比較して提示しやすいことである。

XII エリザベス・ショブの消費分析

そこで、以上の整理を前提に、実践理論に基づいた二つの消費分析を比較してみることにしよう。前稿で環境近代化論第 2 世代の消費分析について触れたので、ここではショブを中心とした議論を見ておくことにする。

ショブの基本的な問題関心は、「より効率的で、持続可能なテクノロジーの促進からより持続可能な実践の促進へ、持続可能な消費問題を再構成することにある²⁷⁾」。ショブがこうした課題を設定する上で視野に入れているのは、「1 週間の入浴が毎日浴びるシャワーに代わった理由は何か」、「デジタルテクノロジーの普及にもかかわらず、エネルギー需要が加速してしまうダイナミクスとは何か」、「空調の急速な普及をどのように説明するか」など、具体的な生活課題である。ショブが求めたのは、テクノロジカルなイノベーションと調達インフラとの共同進化という T と A の関係であった。

ショブは、快適性 (comfort)、清潔 (cleanliness)、利便性 (convenience) という三つの C の改善がイノベーションを生み出し、それが消費主体の日常生活の中でルーティン化した結果環境問題を出現させてしまったことから、実践におけるテクノロジーの役割を分析対象に据える必要性を強調している。世界の約半分のエネルギーがビルで使われたり、洗濯に家庭で使用されている水の約 70% が使われ、冷水でも洗濯ができるようになったという状況は、三つの C を求める消費主体の欲求が、日常生活に浸透し、身体化されているからである。これまで環境経済学は、こうした状況を、エネルギー、水などの資源管理の問題として分析してきたが、実践理論は、サービスや日常生活の経験というように、別の視点から分析しようとしている。ショブは、この状況を分析するには、三つの C を求める消費主体の欲

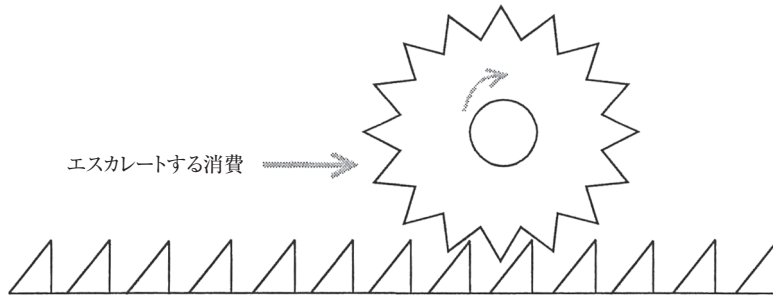
求を受け止めるイノベーション分析が必要であることを強調している。

ショブの問題関心は、イノベーションによって変容を迫られる生活様式が身体化され、ルーティン化されていく実践が「通常化」(ノーマライゼーション)していく過程にある。ショブの目は、この過程に合わせ、環境負荷が増大している現実に向けられている。注目すべきは、その現実が、快適性、清潔、利便性の三つの分野で、それぞれ異なった様相を呈していることである。ショブが注目するのは、こうした様相に現れる統合モデルの違いである。快適性の領域でショブが強調するのは、イノベーションと実践との関係、すなわち社会的組織化(社会的統合)がミクロ、メゾ、マクロの三層にわたって垂直的な交差状態に置かれていることである。こうした垂直的統合は、ボトムアップの方向とトップダウンの二つの方向から同時に追求されている。ショブは、室内空調の事例を取り上げ、快適性を求める消費主体の、ミクロレベルからメゾレベルを経由し、マクロレベルに到達するボトムアップの方向性と、「構造化された、均一な、トップダウンの方法で、世界中の家庭に入り込んできた」過程の二つを分析する必要性を訴えている。

ショブは、その上で、快適性を追求する消費主体の欲求が不可逆的性格を持ち、その結果、環境負荷も拡大するだけとなることを指摘している。ショブは、消費がエスカレートするだけになってしまう性格を「のこぎり刃」(ratchet)に喩えている。第3図はそれを表わした概念図である。この図に示されているように、快適性を追求する心性が身体化され、ルーティン化されてしまえば、のこぎり刃は左から右に動くだけで、逆回転させることはできない。勿論、機械空調に対して自然換気の方がよいと考える人もいるだろう。しかし、これでは、ホモソシオロジカスの人間像を求める人もいるというだけで、なぜ一定温度の室内環境で過ごしたいと考える人々が多くなっていくのか、なぜこの傾向が普遍化されるのかという問いに答えたことにならない²⁸⁾。

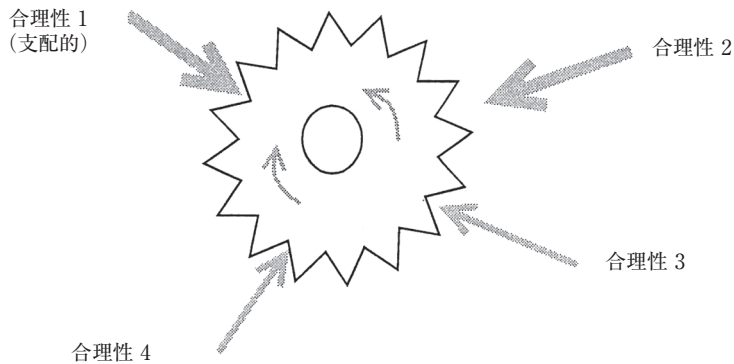
それに対して、清潔の領域は、行為主体自身、毎日洗濯するとか、毎日シャワーを浴びるといった主体的欲求をイノベーションに具体化するとした水平的統合の事例として取り上げられている。垂直的統合がテクノロジーのダイナミックスを表わす第1の方法であるとするれば、清潔の領域では、社会的実践同士の水平的協調(horizontal coordination)や水平的統合という第2の方法が提示されている。この領域を概念図で表したのが第4図である。ピン歯車は、のこぎり歯と違って、左右どちらにも回転させることができる。図では、歯車を回転させる4つの合理性が示され、どの合理性が強いかによって回転方向(環境負荷を強める方向か否か)も決まってくる。左上に書かれている合理性1が支配的(dominant)と注記されているのはそのためである。ショブは、この図の「メッセージは実践の再形成が多様な要素が交差していることにある」と述べている。シャワーを浴びようとする時、わずかな水しか使わないようにしたいとか、シャワー回数を少なくしようとする場合もあるかもしれない。しかし、清潔さを求める合理性が支配的であるならば、これまで以上に水は大量に

第 3 図 のこぎり歯



(出所) Elizabeth Shove, *Comfort, Cleanliness+Convenience*, Berg, 2003, p. 195.

第 4 図 ピン歯車



(出所) Elizabeth Shove, *op. cit.*, 2003, p. 195.

消費されるだろう。その結果、清潔の領域も、のこぎり歯と同じように、環境負荷を増大させる方向しか展望できないかもしれない。それだけ人々のニーズは環境に対して「脆弱」である。しかし、ショブが清潔の領域で強調しているのは、入浴やシャワーが社会的構築物である以上、例えば体臭に対する社会的意識が変われば、ピン歯車が逆に回転する可能性もあるという点である。ピン歯車の部品全体がどの方向に動くのかは、歯車がどのように噛み合っているかにかかっている。すなわち、繊維の質、洗濯機、清潔さの概念といった相互に依存し合う、ショブが「システムのシステム」と呼ぶ関係によってどのような方向に歯車が動くか予測できないのである。ショブはこのことから、消費主体とシステム（構造）との水平的関係を分析することが何よりも重要だと指摘している²⁹⁾。

利便性の領域は、これに時間軸が加わった統合の形をとる。

「簡潔な表現を用いるならば、……清潔に関する章が「水平的」秩序を考察しているのに対して、快適性についての章は通常実践の「垂直的」構造化を強調している。利便性と協同化に関する最終章は、経験、期待、技術的・道徳的或いは象徴的一貫性の点から見た統合と比較することで、統合の時間的領域を精査したものとして読むことができる。しかしそこで

持続可能な消費—二つのバージョン (3)

は同時に、どのように水平的領域と垂直的領域が交差しているのか、その交差がどのようにそれ自体変化の起動力となっているのかの説明が展開されている³⁰⁾。

ここで注意しておかなければならないことは、水平的統合が水平的秩序、垂直的統合が垂直的構造化と表現されていることである。構造化はテクノロジーが主因となって垂直的に行われるのに対して、秩序化は行為主体によって水平的に行われる。このように、エイジェンシーと社会的統合は水平領域に属し、テクノロジーが果たす決定的役割は垂直領域に属すると考えられている。利便性の領域は、これに時間概念が加わり、統合のプロセスが時空間の中に位置づけられている。それと同時に、この領域は、垂直的統合と水平的統合の交差点で、どのような統合が行われているのかを明らかにすることができる領域でもある。

第5図は、三つの領域のモデルを図示したものである。清潔領域の水平的統合は「レジームの寄せ集め」と表記されているメゾレベルで現れる。ここで表記されている「ものごとを行う「私のやり方」」とは行為主体が行う実践を指している。水平的統合は、「システムのシステム」と「私のやり方」が相互に作用し合う二重化の過程である。それに対して、垂直的統合は、進化する社会技術的ランドスケープと表記されているマクロレベルや、機能する斬新な「形状」と表記されているミクロレベルの循環の中で、トップダウンとボトムアップの両方のベクトルを含む形で行われている。両者が交差する地点は、利便性の領域として説明された、社会的時間的統合が現れる場所である。このことから、ショブは、「第11-2図(注：第6図)は、若干異なる形でこうしたスパイラルを表わしている、しかしどのように社会の社会時間的秩序がノーマルで、必要な実践概念を結びつけているものの垂直的な方向の説明と水へ方向の説明とを結びつけているのか、またそれらはどのように進化していくのかを示している」と述べている³¹⁾。

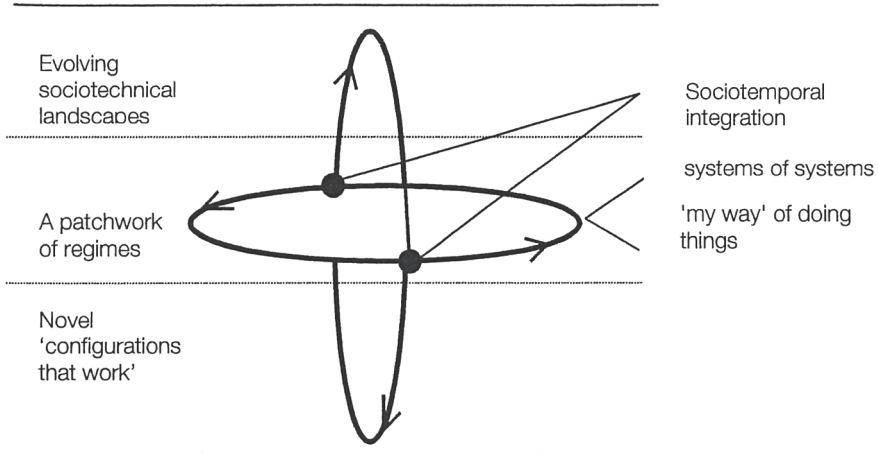
XIII 二つの実践理論に基づく消費分析

ウェルチとウォーデは、「我々は、エイジェンシーの理解が、持続可能な消費という分野の二つの主なプログラムの間で基本的違いとなって現れていると考えている」と述べている³²⁾。ここで指摘されている二つの主なプログラムが、シュバルガレンを中心とする環境近代化論第2世代と、エリザベス・ショブを中心とする環境イノベーションの役割を強調する持続可能な消費研究である。この二つの研究は、それぞれ異なる知的資源に依拠しているために、異なる展望が導き出されている。シュバルガレンを中心とする環境近代化論第2世代とショブの消費分析の基本的違いはどこにあるのだろうか。

(1) 消費様式を変更する主因—エイジェンシーとテクノロジー

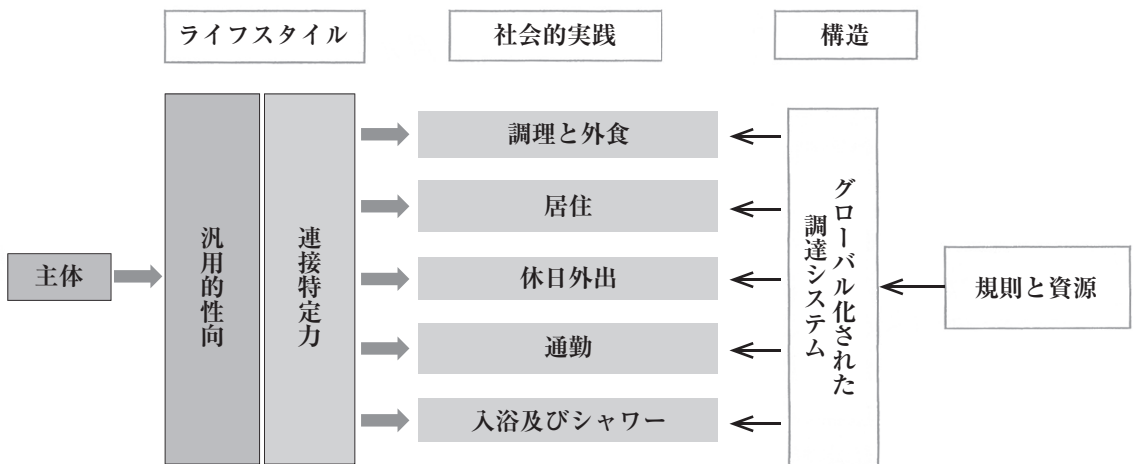
両者の基本的違いは、IPAT式の、A（豊かさを追求するライフスタイル）とT（環境テ

第 5 図 「垂直的」及び「水平的」理論の統合



(出所) Elizabeth Shove, *op. cit.*, 2003, p. 195.

第 6 図 ライフスタイルの汎用的性向と接続特定力



(出所) Gert Spaargaren and Peter Oosterveer, Citizen-Consumer as Agents of Change in Globalizing Modernity: The Case of Sustainable Consumption, *Sustainability*, 2010, vol. 2, p. 1895.

持続可能な消費—二つのバージョン (3)

クノロジーの果たす役割) の関係を考察する視点の違いにある。IPAT 式の右辺にある環境に影響を及ぼす三つの要因を個別に考察することもできるが、ワクナゲルが A と T を消費 (C) にまとめたように、環境テクノロジーをどのように生活様式に取り入れているかという視点から両者の関係を取り上げることもできないわけではない (ただしその問題点については前稿 (1) 参照)。シュバルガレンとショブのアプローチの違いは、A と T の関係の理解の違いから生じている。ウェルチとウォードは、シュバルガレンとショブの二つのプログラムを対比しながら、両者の違いを際立たせている。

「社会構造が媒介した個人的、集団的エイジェンシーの「転換能力」に関するシュバルガレンの理解では、こうした構造の制約力を認めつつ、調達システムのダイナミックスを説明する人間エイジェンシーの存在が仮定されている。他方、ショブは、科学やテクノロジー研究、イノベーション研究に基づく知的刺激に依拠しながら、いかに生活様式が道具、機器、物的対象、そしてテクノロジーとその利用者の相互構成、モノと社会テクニカルシステムの構成役割の中に位置づけられ、刻み込まれているかを強調している。シュバルガレンは、実践組織を新しく変更しようとする市民消費者の意識的努力、持続可能なルーティンを確立する再帰的主体の能力、持続可能な方向に移行する資本主義のダイナミックスに期待する楽観主義を明らかにしている。それに対してショブは、明確な論争点が継続的改革の必要条件であるかどうか、経路依存性を強調することで、環境に配慮した消費者のコミットメントが日常生活の慣行を再定義しうるのかという疑念を表明している³³⁾」。

シュバルガレンを中心とする環境近代化論第2世代が強調するのは、構造を転換しようとする能力を備えたエイジェンシーの存在である。既存の環境テクノロジーが消費の非持続的様式しか保証しないのであれば、それを改善していくために必要とされるのは、持続可能な生活様式に向かう市民-消費者の自律した主体的行為である。それに対してショブが強調するのは、環境に優しいテクノロジーが日常生活に浸透し、刻み込まれ、「自然化」、「通常化」していくプロセスである。そこでは、消費主体の自律した行為より、環境テクノロジーが生み出される要因分析と、それが日常生活に浸透していく経路依存性 (path dependency) が問題にされている。

(2) 実践の位置

こうした両者の違いは、実践理論を用いて持続可能な消費を説明する際の実践の位置の違いとなって現れてくる。ショブとウォーカーは次のように述べている。

「シュバルガレンやサウサートンなどは、消費者、生産者、調達システムの関係が、実践を「通じて」仲介、協同生産されていると論じている。こうした考えに基づいて、シュバルガレンは、消費者行動が調達システムによって可能となり、制約され、文脈化されていることを指摘するために、「社会的実践アプローチ」と呼ぶものを活用している。この説明にお

いて、「社会的実践」とは「食材」とか「調理」といった日常生活領域を述べたものであり、これらがシステムと行動が相互作用する場として想定されている。本論文で私が探究するのは、社会的実践がたんなる相互作用の「場」(sites)ではなく、その代り、全体を秩序化し、組み合わせるといったラディカルな提案である³⁴⁾ (ゴチは引用者)。

前稿で見たように、シュバルガレンの社会的実践モデルの場合、一方における人間主体とライフスタイル、他方における社会的構造とグローバル化しつつある調達システムが設定され、両者をつないでいるのが冷暖房、洗濯、調理などの社会的実践であった。この引用文にもあるように、行為主体と構造は社会的実践を「通じて」関係づけられ、再生産されている。社会的実践は両者が相互に作用し合う「場」である。シュバルガレンのプログラムにおいてこの「場」こそ、両者が出会い、実践が行われる「消費連結点」であった。

それに対してショブやウォーカーが想定するのは、仲介役としての実践ではなく、実践を構成する諸要素「全体を秩序化し、組み合わせる」という「ラディカルな提案」である³⁵⁾。ショブのプログラムでは、行為主体も実践を構成する要因のひとつであるという認識に立って、要素全体の秩序を考えようとしている。シュバルガレンの議論では、供給サイドの議論に重心が傾き、消費主体が求める需要サイドの議論が手薄になってしまう結果を招くと考えられているからである。構造化理論が主体と構造の相互作用を課題としていたといっても、エイジェンシー概念が不十分にしか掘り下げられないまま消費分析にあてはめてしまえば、構造に軸足を置いた議論だけが進んでしまうことになる。シュバルガレンが消費主体の役割を重視せざるをえないのは、こうした構造化理論の弱さの裏返しであった。

実は、シュバルガレン自身、こうした弱さを一部認めていたきらいがある。シュバルガレンは、先に説明した設定のもとで、環境近代化論を消費分析に適用する際の問題群として、次の三つを挙げている³⁶⁾。

- ① 社会的実践の参加者は、供給者が行うことのできる緑のイノベーションの量と質の双方から、緑の調達レベルをどのように特定することができるのか。
- ② 消費という社会的実践への緑のイノベーションの浸透或いは合体、とくに社会的実践に加わる新しい製品、対象物、テクノロジーと関連した中心的な変化のダイナミックスについてどのようなことが言えるのか。
- ③ 社会的実践に参加する市民-消費者は、個人及び社会的実践の双方において、アイデンティティ形成や、緑のライフスタイルやライフスタイル・ポリティックスの出現の過程における緑のイノベーションについてどのようなことが言えるか。

ここで興味深いのは、緑の調達に関わる第1の課題や、ライフスタイルやライフ・ポリティックスに関わる第3の課題については環境近代化論の理論的枠組みを用いて考察することができるものの、環境イノベーションを起動力とした社会的実践のダイナミックスについては、ショブの「移行理論」(transition theory)の助けを借りなければ詳細な考察は難しい

持続可能な消費—二つのバージョン (3)

ということ、シュパルガレン自身率直に認めていたことである。こうした認識を持たざるをえないのは、実践を行為主体と構造を仲介する役割を持つものとしてしか位置づけることができない弱さから派生していると言ってよい。

(3) エイジェンシーの評価

それでは、消費要素の「全体を秩序化し、組み合わせる」というショブの提案は、具体的にどのような消費分析となって現れたのだろうか。ショブは『快適性、清潔及び利便性』の冒頭で、三つの課題を挙げていた。

「本書は三つの期待から作られている。第1に、日常的な目に見えない実践の分析を通じて、消費、テクノロジー、社会変化の理論をあらためて検討することである。第2に、快適性、清潔の慣行がどのように、そして何故動いているのかを明らかにすることである。第3に、期待や習慣の集団的再構築を行うために、社会環境研究や政策の焦点を動かすことである³⁷⁾」。

このようにショブの関心は、三つのCがともに進化し、それがイノベーションにつながることによって、新たな日常の実践と社会改革の展望が生み出されていく過程の分析にあった。実は、このような関心の中に、シュパルガレンを中心とした環境近代化論第2世代の問題関心に対する批判が含まれている。

「シュパルガレンは、消費者のコミットメントが「家庭と社会的-物質的-集団的システムとの相互関係と同時に、家庭消費の組織に相当影響を及ぼし、それを変更することになるだろう」と結論づけている。しかし、そうした動きは、快適性、清潔、利便性という点で、人々が期待しているものを定義するだろうか。必ずしもそうとは言えないし、環境配慮が、日常生活どのようなものであるべきかについての現代理解が置き換えられるほどの重みをもっていることが証明されなければ、そのようにはならない³⁸⁾」(ゴチは引用者)。

この指摘に見るように、問題の焦点は日常的にルーティン化した実践を変える要因分析にある。シュパルガレンはそれを消費主体のエイジェンシーに求めたが、ショブはその指摘を一方で認めつつ、それが日常生活に浸透している三つのCに対する認識を置き換えるほどの重みを持つことが証明されていなければ、持続可能な消費につながる転換は明らかにならないことを指摘している。この指摘から学ぶべきことは、構造と対極に位置している行為主体の潜在能力に期待する前に、三つのCで例証された、すでに身体化されている欲求のために身動きできなくなっている行為主体を一度客観視し、その中に新しい構造を生み出す要因を検出できるかどうかを分析することである。行為主体の認知能力とはそうした動きも含めた能力であり、ギデンズが言う実践知だけに狭く限定することは、エイジェンシーの可能性も、持続可能な消費につながる展望も閉ざしてしまうことになる。求められているのは、既存の消費習慣に代わって新しく登場する消費実践の要因分析である。ギデンズのように実

実践だけを強調するのであれば、新旧の消費習慣の違いが比較されるだけで、どのような形で移行が行われたのかを明らかにすることは難しくなる。シュバルガレンは、行為主体が調理や外食、居住、通勤、入浴などの社会的実践を行うとき、両者をつなぐライフスタイルの中に、汎用的性向 (general-dispositional) と接続特定力 (conjecturally-specific) の二つの「内部構造」があることを指摘している。シュバルガレンによれば、汎用性向とは社会心理学の「態度」に似ており、接続特定力はそれを土台に行為主体が臨機応変に社会的実践を行う応用力といったものである。シュバルガレンはライフスタイルがこの二つの行為主体の内部構造によって構成されていることによって、消費実践を個人主義的モデルに陥らず、個人的なことがらと社会的なるものの接続が可能になると説明している³⁹⁾。残念なのは、シュバルガレンのエイジェンシーの説明がここで終わってしまっていることである。

ショブが強調したのは、消費様式の移行を説明する要因として、エイジェンシーとその中に身体化されるテクノロジーの関係性である。「日常生活のあり方についての現代理解が置き換えられるほどの重み」とは、エイジェンシーとテクノロジーのつながりが、新しい、環境に優しい消費様式となって具体化されるかどうかにかかっていることが強調されている。

(4) 消費の効率性と充足性

このようなショブの指摘は、効率性と充足性の関係を取り上げようとしている本稿の問題関心にとって重要な意味を持っている。ショブの関心は、イノベーションの役割だけを強調することで、消費を効率性の問題に限定しようとしているのではない。むしろ逆である。彼女の関心は、効率性の先にある充足性の展望に向けられている。

「環境的に重要な消費議論はもっぱらサービスより、資源に関心が寄せられ、環境意識の促進や、個々の消費者の選択のレベルでの超過や制約に関心が集中してしまっている。こうした政治的に説明可能な強調は、「通常の」実践の枠組みや形成の先にある設問を覆い隠してしまっている。これらの点が重要であることは間違いがないが、集団的規範によって統治され、ルーティンや習慣に対する安定効果があるモノの世界や社会技術システムによって行われてきたことで、消費の拡大が慣習化されていることが見落とされている。より洗練された説明はいかに選択が構造化されてきたかを指摘しているものの、期待や慣習より、資源や効率性に関心を集中することで、環境主義者は通常の消費における決定的発展を指摘したり、それに関わることができずにいる⁴⁰⁾」(ゴチは引用者)。

ここで強調されているように、ショブの関心は、消費主体の欲求を受け止める環境イノベーションの役割と同時に、「消費の拡大が慣習化されている」日常生活のあり様を分析の中心に据えなければ、充足性の関心に結びつかないという点にある。ここで問題とされているように、日常の実践が慣習化されることで、需要の拡大もまた慣習化されてしまっている。これまで経済学は、市場から独立して、人びとのニーズから外生的に生まれる需要の存在を

仮定してきた。消費の拡大はニーズの充足と拡大を背景としていた。しかし、消費の拡大や変化は、「何が消費されているのか、どのように変化しているのか、これらの変化は実践や関わる人々の生活様式にとってどのような意味を持つのかということに注意を払うこと」なしに理解することはできない。天候の変化に関わらず1年中決められた屋内環境で過ごすということはどのような意味を持っているのか、先進国で1年に274回も洗濯機が使用されるようになった理由は何かなど、慣習化された日常的行為とそれが環境に与える負荷の関係を問うことが重要となる。このように、需要や消費の動きを探るには、日常的な生活様式、したがって実践のあり様を分析することが何よりも必要である。ショブは、こうした観点から、「どのようにルーティン化されている生活様式が位置づけられ、道具や機会、物的対象の中に刻み込まれているのかを理解するには、既存の消費理論を越えること」が必要になっていることを強調している。そのためショブは、「実践、期待、生活様式はどのように自然化されたのか。エスカレーション、標準化、差別化、発展の過程に活力を与えているものは何か」という問いを立てている。ここで言うエスカレーションとは消費主体が内生的に求める需要の拡大を、標準化とは三つのCを具体化した実践が日常生活の隅々に浸透し、一般的になっていく過程について述べたものである。その上でショブは、この過程が家庭やある特定の国民経済だけに限定されるのではなく、グローバルに進展していることから、「対象となるのは、通常の、ルーティン化された、当然視されている実践の、巨大な、ある場合には、グローバルな動きである」ことも指摘している⁴¹⁾。

消費の拡大が日常生活の実践のあり方に制約されているということは、消費を抑制するという課題の解決が、「脱ルーティン化」の難しさと比例して、相当困難であるということの意味している。勿論、IPAT式のTの改良によって、消費の拡大を上回る環境効果を期待できる場合もあるだろう。しかし、三つのCを求めてきた結果、Tの改良を上回る環境負荷を招いてしまうのであれば、消費を抑制する期待は空回りするばかりである。一度開発されたタイプライターやパソコンのキーボード配列を変えることが難しいように、ルーティン化された日常生活を変えることはそう簡単にできることではない。このことを例示するために、ショブは、次のような、ビル建設を依頼した顧客と建築エンジニアとのやり取りを紹介している。

「クライアントが空調設備のない建物を希望していたことから、我々は、どのような条件を望んでいるのか、どの程度の室温を達成したいと思っているのかについて話し合った。その際、彼らは、「快適性はどのようになるだろうか」と問いかけてきた。我々が彼らにアドバイスしたのは、「ジャケットやネクタイを取るよう調整できませんか」ということだった。彼らが言ったのは、「そんなことは無理、我々は弁護士で、ドレスコードというものがある」。それに対してエンジニアが答えたのは、「快適さを本当に望んでいるのなら、空調設備を備えたビルの方がよいでしょう、そうしなければ不快な思いをするだけです⁴²⁾」。

勿論、ルーティン化された日常実践を変えることが難しいといっても、人々のニーズに合わせて実践自体が変容してきたことも事実である。その要因のひとつにイノベーションがある。日本でも、「三種の神器」の普及によって、生活のあり方が変化し、働き方、家族構成、住環境などに大きな影響を及ぼしてきたことはよく知られている。シュバルガレンを中心とする環境近代化論第 2 世代の弱さは、消費主体のエージェンシーの役割が強調されるあまり、生活様式や実践のあり方についての分析が途中で終わり、環境効率性とエネルギー消費との関係が明らかにされないという欠点を抱え込んでしまっている点にある。

注 _____

- 1) Birgit Brauchiler and John Postill (ed.), *Theorising Media and Practice*, Berghahn Books, 2010, p. 6.
- 2) Alan Warde, Consumption and Theories of Practice, *Journal of Consumer Culture*, vol. 5 (2), 2005, p. 136.
- 3) 倉田良樹「構造化理論から知識の社会学へ」『一橋社会学』3, 2011年, 8頁。
- 4) Gert Spaargaren, The Ecological Modernization of Social Practices at the Consumption Junction, Discussion Paper for the ISA-RC-24 conference, 2004, p. 2.
- 5) Elizabeth Shove, *Comfort, Cleanliness+Convenience*, Berg, 2003, p. 4.
- 6) Andreas Reckwitz, Toward a Theory of Social Practices A Development in Culturalist Theorizing, *European Journal of Social Theory*, 5 (2), 2002, pp. 249-250.
- 7) Theodore R. Schatzki, *The Site of the Social*, Pennsylvania State University Press, 2002, p. 71.
- 8) *ibid.*, p. 87.
- 9) Theodore R. Schatzki, *Social Practices A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social*, Cambridge UP, 1996, p. 90.
- 10) Warde, *op. cit.*, p. 134.
- 11) Schatzki, *op. cit.*, pp. 77-78.
- 12) Daniel Welch and Alan Warde, Theories of Practice and Sustainable Consumption, Lucia A. Reisch and John Thorgersen (ed.), *Handbook of research on sustainable consumption*, Edward Elgar Pub., 2015, p. 93. 実践概念の理解のためには, Elizabeth Shove, Mika Pantzar & Matt Watson, *The Dynamics of Social Practice Everyday Life and How it changes*, Sage, 2012を参照。
- 13) Inge Røpke and Toke H. Christensen, Transitions in the wrong direction? Digital technologies and daily life, Elizabeth Shove and Nicola Spurling (ed.), *Sustainable Practices Social Theory and Climate change*, Routledge, 2013, p. 52.
- 14) アンソニー・ギデンズ『社会理論の最前線』(友枝敏雄他訳), ハーベスト社, 1989年, 238~243頁。
- 15) ギデンズ, 前掲書, 242頁。
- 16) Elizabeth Shove, Mika Pantzar & Matt Watson, *op. cit.*, p. 7.
- 17) Reckwitz, *op. cit.*, p. 256.

- 18) Spaargaren, op. cit., p. 14.
- 19) この点についてはとくに, Andreas Recwitz, The Status of the “Material” in Theories of Culture: From “Social Structure” to “Artefacts” *Journal of the Theory of Social Behaviour*, 32-2, 2002 を参照。
- 20) Schatzki, op. cit., p. 71.
- 21) Spaargaren, op. cit., p. 15.
- 22) *ibid.*, p. 16.
- 23) Warde, op. cit., p. 137.
- 24) Warde, *ibid.*, p. 137.
- 25) Warde, *ibid.*, p. 137.
- 26) Welch and Warde, op. cit., p. 88.
- 27) Welch and Warde, op. cit., p. 91.
- 28) Shove, op. cit., p. 194.
- 29) Shove., op. cit., pp. 194-195.
- 30) Shove, op. cit., p. 192.
- 31) Shove, op. cit., p. 192.
- 32) Daniel Welch and Alan Warde, op. cit., p. 88.
- 33) Welch and Warde, op. cit., p. 89.
- 34) Elizabeth Shove and Gordon Walker, Governing transitions in the sustainability of everyday life, *Research Policy*, 39, 2010, p. 471.
- 35) Shove and Walker, *ibid.*, p. 471.
- 36) Spaargaren, op. cit., p. 9.
- 37) Shove, *op. cit.*, p. 4.
- 38) Shove., *op. cit.*, p. 8.
- 39) Gert Spaargaren and Peter Oosterveer, Citizen-Consumer as Agents of Change in Globalizing Modernity: The Case of Sustainable Consumption, *Sustainability*, 2010, vol.2, p. 1896. この点については, 倉田前掲論文, Rob Stones, *Stracturation Theory*, Palgrave, 2005. を参照。
- 40) Shove, *op. cit.*, pp. 8-9.
- 41) Shove, op. cit., p. 9.
- 42) Elizabeth Shove, Efficiency and Consumption: Technology and Practice, *Energy & Environment*, vol. 5, no.6, 2004, p. 1057.